

《調査報告》

## 「信念の空間」の考察：昭和大学と金沢工業大学の視察から

中村 隆志 (新潟大学)

やはり空間規模が異なる。これが、2つの大学を視察した際に得た強い印象である。キャリア創生研究会は、2018年に昭和大学の富士吉田キャンパス、2019年に金沢工業大学に視察調査に出かけ、それぞれの担当の方々インタビューを行い、また、教育現場の実態を見学することが出来た。

昭和大学は、医学を中心とした医療関係者養成大学であり、1年次に全学部全学生が富士吉田キャンパスの学生寮に入寮し、他学部の学生との共同生活を送りつつ、近隣の医療施設の訪問を通して、医療の仕事に就く者の社会性と見識を養う点に突出した特徴がある。金沢工業大学は、ソフトからハードまでの工学に関する技術者を養成する大学であり、1年次からの基礎学習への手厚いサポートを始め、きめ細かい学習カリキュラム、近隣企業との共同プロジェクト、テレビ局と連携した広報番組の定期放送などの特色を持ち、高校の進路指導教諭を対象にした「面倒見が良い大学」調査では、15年連続でトップを維持している[1]。より詳しいことは、本ジャーナルの他稿、あるいは大学評価を行うホームページなどを参照いただきたい。

両大学とも、その教育システムの特徴が評判を生んでいるものの、その評価に安住することはない。学生と向き合う現場では、常に学生に対する注意深いフォローが徹底されており、その配慮の仕方は、年々レベルアップしているのだろう。そのきめ細かさは、各の教育に対する信念に由来する。よりよい医療従事者、工学系技術者を育てるための方法論が、教職員に共有されており、徹底されている。キャンパス内の校舎利用の仕方は、建設当時の使途と異なり、再利用がなされていることが多いが、このような即応性も、時代に応じた臨機応変さの証であり、キャンパスの様々な場所に教育の信念が行き渡っている。それぞれの信念の空間規模はキャンパスそのものの広さであり、一つの基本理念が貫いているとみて良いだろう。

文理にまたがる総合大学においては、多様性と独自性が尊ばれ、個々の教員、あるいは教員グループは、自家製の信念を教育内容に実現することが、ある程度許容されている。自由度は相対的に高いものの、それぞれに異なる多くの信念が混在する中では、信念の空

間規模は、限られた小さなものになる。学部や学科という単位も一枚岩でない。それぞれの信念の空間規模は、校舎の一部、キャンパスの一角、小さな研究室などに限られるか、あるいは、授業を行う教室において、特定の時間帯のみ、特定の信念が通用する空間が立ち現れる程度である。文理にまたがる総合大学は、異なる信念がひしめき合う空間構成になっている。それら信念が及ぶ空間規模は昭和大学、金沢工業大学のそれと比べるとそれぞれが非常に狭い。総合大学の個々の学生にとっては、複雑な状況に直面せねばならなくなるが、一方で、幅の広い選択権がある、という見方も出来る。学年進行による専門分野の選択は、個々の教員が呈示する信念を選択することでもある。

基本理念に貫かれた信念が覆うキャンパスにおいては、学内の資源は、有機的に機能して、医療従事者や工学系技術者の養成を効果的に実現してゆくだろう。一方で、多様な自家製の信念がひしめく総合大学においては、特定の技能を身につけるのは、非効率な面も出てくるだろう。しかし、総合大学の学生は、将来の目標が必ずしも定まっておらず、自らの進むべき方向を選択していかねばならない者が非常に多い。そんな学生達には、各教員が呈示する信念を観察、評価、比較した上で選択することが求められる。この場合には、信念の多様性が多いことが、学生にとっては、効果的となる。もちろん、選択は一度きりではなく、学生時代はもちろんのこと、卒業後も様々な選択の機会はやってくるため、結果的に有意義なトレーニングになる。総合大学の信念の空間規模は、それぞれとても小さいが、それ故に、多様な選択肢の供給という面で有機的に機能している。

学生教育が信念に基づいている以上、大学改革は、必然的に空間マネジメントを伴う。空間マネジメントの成否が、今後の総合大学の教育の質に直結してゆくだろう。昭和大学、金沢工業大学に学ぶところは大きい。総合大学においては、多様性と独自性を重んじつつ、人材育成の効果を向上させる方策が、今後も求められる。

[1] 安田 賢治 (2019): ”全国 857 進学校の進路指導

教諭が選ぶイチ押しの大学はどこだ！”、2019.11.08 掲載、大学通信オンライン公式 HP、<https://univ-online.com/article/ranking/7151/>、(最終閲覧 2020.02.09)